



私のひとりごと

「世にも不思議な物語」

私の住んでいる美浜町新庄地区は全戸数で 200 戸たらずの小さな集落であるが、一つの集落としては全国トップの山林面積を保有している。子供のころは、その広大な山や畑が遊び場で、中でも畑で作るトマトやスイカなどは、他人様の物も含め子供にとってはこの上ないご馳走であった。そのご馳走の収穫にあたり、幼なじみとは常に役割分担が決まっていた、幼なじみは実行犯で私は見張り役である。その幼なじみならではの信頼関係と連携プレーで、数々の獲物を収穫したものである。勿論、常に成功とはいかず、こっぴどく叱られた事もあるが、その度に戦略を立て直し挑戦し続けたものである。今にして思えば、随分見て見ぬふりをしていてくれたと思われる。実にのどかな時代であった。

そんなのどかな時代から半世紀が経ち、先日の事である。村の恒久柵維持管理の為、田畑を歩いたときのこと。その日の作業は農作物を猿や鹿の被害から守る電柵の点検である。写真を見て頂いてお解かりかと思うが、入り口のゲートはもはや電柵の柵を越え、特別な地域に入るが如く異様な雰囲気をかもし出し、まさにサファリパークに入る雰囲気と似かよっている。その光景が延々と何キロも続き、その中で人間が働いているのだ。金網越しに見る田畑は、子供の頃と大して代わり映えはしていないが、何か心寂しい思いにかられるのは私だけでは無いと思われる。田畑の中に子供の頃の 1 ページを思い返せば……。



幼なじみと息の合った連携プレーで獲物を収穫し、畑のうねを大人に見つからない様にモグラの如く身を潜めるが、あえなく発見され一目散に退散となる。当時は作物の肥料にする為、いたる所に肥溜めが設置され、肥溜めには上から草や藁などでカモフラージュ？されていた。慌てふためいて逃げ惑う私たちには、もはや道と肥溜めを見分けるほどの余裕は無く、運が悪ければあえなく撃沈で、頭から足の先までク〇まみれとなる。何が情けないと言ってもこれ程情けない事は無く、家に帰れば母親のお説教が追い討ちをかける。

そんな「山猿」のような子供だった私たちが、今こうして電柵の見回りをしている……。なんとも不思議な話である。

ではまた来月もお会いしましょう。
今月も最後まで読んでいただき……

あーがしう
ございました!!

